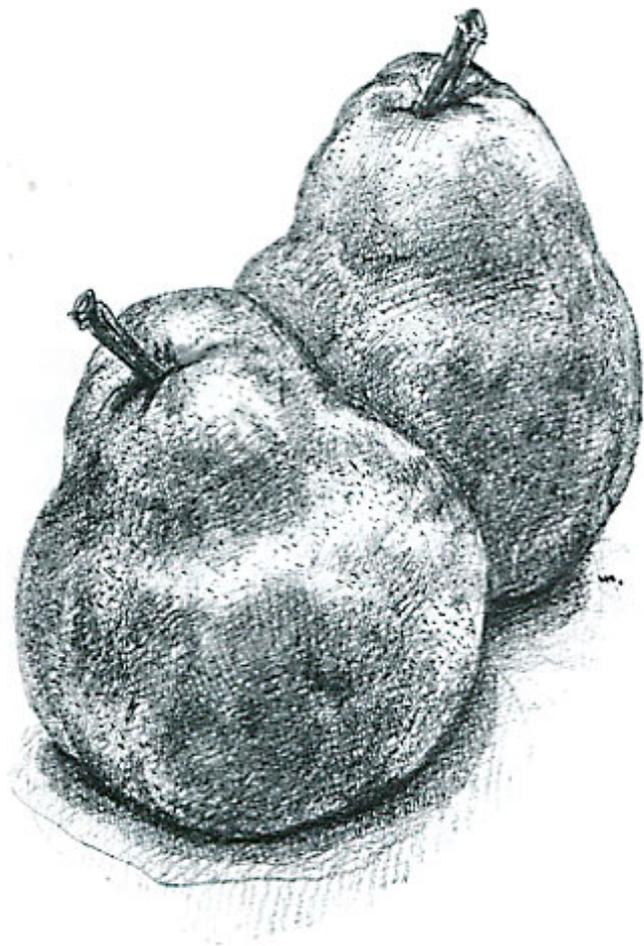


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成22年12月5日発行(毎月5日1回発行)
第50巻12月号(通巻617号)

風土



12

砂時計

神蔵器

子規庵に鶏頭燃えてゐる頃か
名月を波にあそぶす神田川
霧流る音か落葉松降る音か
スカイ・ツリー上へ上へと稲雀
マラソンの過ぎて冬立つ浅間山

魯田の雀隠れに白鷺佇つ
短日の時裏返す砂時計
みみず鳴く二十四時間心電図
霜柱白色レグホン地に放つ
二タ巡りして银杏の実を拾ふ
反故焚きしあとに少しの牡丹焚く
水に来る月のさざなみ源義忌



竹間集

同人作品



衣被

中村 洋子

老いるとは母に似ること衣被
鬼の子や火の粉をかぶる薪能
穴まどひ少し踵の高き靴
柚子匂ふ水尾の里の帝の碑
鞍馬から貴船へ下る穴まどひ
大菩 薩 峠 へ 続 く 秋 桜
秋蝶と入るや礫山美術館

歌仙の間

橋添やよひ

夕月夜当麻の空に塔二つ
「一文字手水」に聴きて秋のこゑ
水音に秋の気配や歌仙の間
爽涼や笙の袋の「青海波」
秋簾広間を隔つ得度の間
子規祀る秋の七草供華にして
つつがなく二百十日の茹で卵

燻べ

南 うみを

梨食うて恋の微熱を冷ますといふ
けふの空高しと手刈鎌を研ぐ
蚯蚓鳴くまで草になる石になる
居待月いなりの揚げをくたくたと
猪除けの燻べに藪のぞめきだす
指先に冷えのあつまる実むらさき
秋深き寺ふるはせてポン菓子屋

物見塚

島谷 征良

向日葵の一日の疲れまだ見せず
五分だけ午睡水上バスの席に
道灌の物見の塚に汗ぬぐふ
炎天下道ゆつくりと坂がかり
土地の名がつきて新種の葡萄かな
蟻の這ふ二百十日の畳かな
丘の上の強き日ざしよ墓洗ふ

行き逢ひの

大竹 淑子

巻雲の端のほつれて刈田かな
鯖鮎サバの瀬となる水の光かな
爽涼さわやかの 拝礼石の風青き
龍淵りゅうに潜み小御所の奥昏き
新月や「一文字手水」水満たす
高処たかなる貫主の墓や 鱗雲
行き逢ひの空といひけり秋彼岸

秋の虹

宮川みね子

震災忌水かけろふが樹をのぼる
初秋の硯に墨の金こぼれ
荒草にぬくみのこもり子規忌かな
つぎの世につづく青空草の花
稜線に雲を押し上げ体育日
イヌマキの太々と幹稲妻す
秋の虹椀に溶きたる吉野葛

帰燕の空

浜 福恵

切株がひとつ帰燕の空の下
薪積むや美山みやまに秋のしぐれぐせ
天水桶の水に映して空の秋
子狸の山に放たれ臭木の実
原子炉を山の向かうに月今宵
お旅所の松亭々と小望月
飛び込んでくる虫もぬて月の句座

北京・西安の旅

— 代田 青鳥 —

首に巻く赤いハンカチ片結び
你好と謝謝と笑顔の爽やかに
遥か来て万里の長城 三句長城幽し秋しぐれ
白帝や片側濡らし雨上がる
秋光や見え隠れして昇り竜
深秋の明暗著き紫禁城
天安門広場の前にゐて秋思
北京烤鴨のターントーブル秋灯
小流れに沈む飯粒秋の雲
柳散る柳並木も絹の国

山河集

同人作品



神蔵器選

木の上に上人在す穴まどひ
内藤 静

倭人伝読み終りたる良夜かな
蓑虫の蓑に天台烏葉の葉

大声で解を繋ぐ芋嵐

朴の実と気づいてよりの空蒼し

風入れや源氏絵巻の母の帯
雲所 誠子

現し身の己に飽きて稲光

稲妻や女人の語る平家琵琶

あす越ゆる信濃追分星の飛ぶ

木の実落つ階千段の久能山

迎火や父のあとから母が蹤き
水井千鶴子

はらからの一人欠けたる雁渡し

ゆれてゐる今が安らぎ秋桜

流星の一つは神のたよりかも
雁渡し土瓶の蓋に穴一つ

石庭の高き梢や小鳥来る
四方由紀子

豊作を山家太鼓の音響く

瓢の笛吹いて初心に戻さる

風の姿に活けて茶席の吾亦紅

友を待つ壺に一束蕎麦の花

満月に上りつめたる観覧車
浅田 光代

秋天へ聳つ組体操のどの山も

観音へ一本の道曼珠沙華

四天王寺 二句

水の秋母の経木を流しけり

澄む水に経木の墨のにじみゆく

◇特別作品◇(抄)

志士の声

大森 尚子

夏の果果に尾を引く桂浜
草田男忌聞かずも聞こゆ志士の声
大海も水の一滴蟻の道
墨色に喜びの浮く月見月
龍馬像ふところに抱く夏の果
いつまでも続く「よさこい」夏の夜
鳴子止む土佐のよだちの男鳴り
見晴るかす志士の眼の涼しさよ
志士の声聞こゆる岬布袋草
九十九折り箭となりて夏果つる

風土独語／神蔵器



蓑虫の蓑に天台烏薬の葉

内藤 静

阿波野青畝の

みのむしの此奴こゝらは萩の花衣

単刀直入の見事な句である。写生句とも言えそうだが、萩の「花衣」は写生ではなく心の眼である。それ故に一読派手な句であるが、その下に蓑虫のあわれさ、かなしみが伝わって来る。

ところで、私は掲出句の、「天台烏薬」を知らなかった。早速事典に当たってみると「根を薬用にする中国大陸原産のクスノキ科の常緑低木。日本には享保年間に渡来し、暖地に野生化している。高さ三メートルぐらいに伸び、樹皮は灰緑色、枝が細く密に茂り、幼時さび色の毛が密生する。互生する葉は薄い革質の広楕円形で、縦に三主脈が走り、長さ三・五センチ、幅二・四センチ、裏面は白色をおび、柔らかい毛が密生するが後に落ちてしまう。根は健胃剤として用いる。日本の本草学者によって天台烏薬と呼ばれたが漢名は烏薬である」とあった。

作者は植物園でこの木を知ったようだが、そこに蓑虫が居たか

どうかは聞かなかつた。そこに蓑虫が居ればよいし、また居なくても、作者の胸のうちにあった蓑虫が、「天台烏薬」という思いがけない木、極端な言い方をすれば、「天台烏薬」と書かれた文字の名前に感応し、この句を賜ったのではなからうか。

風入れや源氏絵巻の母の帯

雲所 誠子

源氏絵巻は正しくは源氏物語絵巻で、源氏物語の各段から興味深い場面などを選び出して絵巻にしたものである。

掲出句の「母の帯」は既婚女性が礼装に用いる五つ紋・裾模様（留袖）の着物に合わせる一番高級な絹の丸帯で、その帯に金糸銀糸などで源氏絵巻が織り上げられている。

作者はたった一度、結婚式に締めていったことがあるだけだろうだが、毎年風入れは欠かしたことは無いとのことであった。それは源氏絵巻の帯そのものに愛着があったことも確かであったろうが、それ以上作者にとって亡き母の年齢に近づけば近づくほどなつかしく、かなしく思慕の情が深くなっているのであろう。肉親のことを詠うと甘くなると言われるが、この句は甘さを承知の上の美意識である。

ゆれてゐる今が安らぎ秋桜

水井千鶴子

能は寡黙の演劇といわれる。激しく回っている独楽は静止しているように見える。大事な場面になればなるほど動きが少なくなっていくには停止し、存在感だけの表現に一切を賭ける。

ところで、人世は一瞬の停止も許されない。激しく動くところ

に生き甲斐がある。掲出句のコスモスも美しく華麗で繊細、ちよつ
びり薄情で気の強いところもある花。龍太さんが大正から昭和の
はじめにかけてのやや古めかしいモダンイズムのような花と言つて
いるのも面白い。それもこれも、細い茎、こまかい葉と共に見る
たびいつもたえず風にゆれ、揺れ動いているからである。もし全
く静止し、突つ立っていたら下手な役者の能を見るような退屈な
ものになるであらう。

風土集



神蔵器選

瀬を碎き婚姻一路に鮭遡る 盛岡 石崎 浄

関伽桶を鼓打ちなす雨台風

胡桃落つ己が水輪を撞いて浮く

沼の秋瑠璃一枚を張りづめに

喪籠りの雨月に長湯使ひけり

母逝くや八月尽の暑き日に

秋旱心臓止めて母眠る

逝く母に秋暁の灯を継ぎ足しぬ

まだ温き骨壺を抱き秋騒雨

母逝きて後の四五日秋高し

星一つ転がり落とす芋の露

露宿す水栽培の八頭

藪からし外して蜂の巣と出合ふ

台風の逸れゆく梯子上りけり

新聞を妻が捲れる夜長かな

盛岡

石崎 浄

津山

生田 作

上尾

根岸 善行

蟬しぐれ御苑をぬけて役人町 京都 西村 雪園

萩一枝盗みし罪をもち歩く

大橋を渡りて離宮萩と月

髪刈つて初秋の風にしたがへる

鶏頭や大和秘仏の里づたひ

穴まどひ楽しき事の多すぎて

忘れ物探してゐるや穴惑ひ

「唄はれよ」に始まる八尾踊り唄

風の盆河原に美しき石拾ふ

秋微雨ギターの絃の錆びしまま

日時計は針を尽くせぬ晩夏かな

みちのくの山は大振り原敬忌

山宿の洋卓にあり榎櫃の実

毬栗の大きな笑みを棒で打つ

稲びかり牛舎の窓に牛の貌

京都

西村 雪園

川崎

山本 浪子

八幡平

伊藤 紫水